

博士學位論文審査結果の概要

ふりがな 氏 名 学位の種類 学位記番号 学位授与年月日 学位論文題目	はしもと ちろえ 橋本 智江 博士（看護学） 甲第21号 令和2年3月14日(学位授与式の日) 介護保険施設における入浴ケア援助者の温熱環境からみたケア実施方法の検討
審査委員	主査 石川県立看護大学 教授 林 一美 副査 石川県立看護大学 教授 長谷川 昇 副査 石川県立看護大学 教授 紺家 千津 副査 石川県立看護大学 教授 川島 和代
審査結果の概要 <p>2020年1月14日に本審査会を開催した。以下に博士論文の概要及び審査結果を示す。</p> <p>本論文は介護保険施設で行われている入浴ケアが援助者に及ぼす影響を可視化し、温熱環境の視点から、入浴ケアの実施方法を検討することを明らかにした研究である。論文は3つの調査から構成され、それぞれの結果を統合してケア実施方法の検討を行った。</p> <p>調査1は、50床以上の介護保険施設（介護老人福祉施設、介護療養型医療施設、介護老人保健施設）156を対象として、入浴ケア体制に関するアンケート調査による実態把握をおこなった。結果は、浴槽の種類、1週間当たりの入浴ケアの実施日数、入浴ケア担当方法、入浴ケア担当時間、や休憩の有無に関する施設の特徴が明らかになった。介護老人福祉施設は、個別浴槽の設置が多く、1人の利用者の入浴ケア全過程を1人の援助者がとおして担当する方法（以下、マンツーマン）が介護療養型医療施設や介護老人保健施設と比して多かった。</p> <p>調査2は、介護老人福祉施設の介護職員7名を対象として、入浴ケア前後の生理的反応測定と主観的疲労感、浴室の温熱環境測定、入浴ケア場面の観察を実施した。さらに対象者の勤務開始から終了までの心拍数を継続測定した。援助者の生理的反応は、入浴ケア前後で体温・収縮期血圧、体重・着衣重量が有意に変化していた。主観的疲労感は、腕のだるさ、腰の痛みが上昇し、落ち着かない気分が軽減していた。浴室温熱環境測定結果と観察データから、誘導、着脱、洗身と役割を分けて担当する方法は、浴室温熱環境が一定で推移する傾向があり、マンツーマンは人の出入りに伴い一時的に気温・湿度の低下が認められた。</p> <p>調査3は、調査2の対象者3名に対して、入浴時の測定結果を提示して、入浴ケア援助者に結果を見て感じることをインタビューし、質的なデータ分析を実施した。その結果、援助者は【浴室・脱衣室・廊下は気温・湿度の差がある】【浴室環境を改めて考えると大変だと思う】【利用者に合わせるため暑さはどうにもできない】【入浴ケアが終わる時間が遅くなると焦る】を感じながらケアを実施していたことが明らかになった。</p> <p>3つの調査からケア実施方法として、援助者にとって入浴ケア担当時間が200分以下ならば温熱環境による影響が避けられること、浴室温熱環境のデータ値による可視化の重要性、マンツーマンによる入浴ケア実施が他に比して優れていることが示唆された。</p>	

本研究は、浴室温熱環境に焦点を当て、施設で実際に行われている入浴ケアが援助者に及ぼす影響を可視化したこと、観察結果と入浴ケア実施方法の詳細を得るための観察データを合わせた上で、ケア実施方法への提言をおこなっている点に独自性と新規性が認められる。本研究で得られた結果は、施設における入浴ケア援助者の労働環境に関する知見となる。論文は、入浴利用者にとっての快適性を脅かさない援助者の環境を考えることを前提に論じられており、看護・介護現場のケア向上に寄与するものと評価された。予備審査においては、入浴ケア体制に関する提言の明確化、入浴ケアの歴史性の文献レビュー、統計に関する説明、表記に関する修正の必要が指摘された。学生からは、加筆・修正がなされたものが再提出され、審査員全員が修正を論文にて確認した。

以上により、上記学生は審査員4名全員が博士学位論文審査及び、最終試験に合格したと判断した。